

平成18年10月23日

第193回『21世紀塾』参考資料

(第20回提言)

「伊豆の紅葉」をまず地元の我々で堪能しよう

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

「紅葉」といえば、我々は、すぐ、お隣の山梨県の「昇仙峡」だとか、奥日光の「中禅寺湖」、それに「奥入瀬」や「十和田湖」や「八幡平」など、北関東から東北の山々を思い浮かべる。

あるいは、寒暖の差が激しく、紅葉が鮮やかとされる京都の神社・仏閣を思い浮かべる。

◇ ◇ ◇

しかし、実は「暖国・伊豆」が、紅葉の見どころあふれた場所であることは、案外知られていない。

例えば、伊豆への玄関口である三島の、文教町の「イチョウ並木」の黄葉や、遺伝学研究所へ続く坂道の「桜並木」の紅葉は見事なものだし、あまり注目されていないが、お隣の沼津市の「香貫山」などは、もともと里山林として使われてきたせいも、黄葉の中にハゼやモミジの紅葉が入り混じって、いわばジワ〜ッと全山が燃えるようになっている。

つまり、我々自身が「気候が温暖な、この地域の紅葉など、大したことはない」との先入観にとらわれているだけなのであって、実は「暖国・伊豆」の紅葉・黄葉は、素晴らしい。

どうしてかといえば、理由は簡単で、要するに「暖国」ということは、紅葉がないということではなく、つまりは紅葉が日本一遅く色づくということであり、実際に熱海の「梅園」では、11月中旬から12月上旬にかけて、カエデ・モミジの紅葉が園内を彩



三島市文教町のイチョウ並木



遺伝学研究所へ続く桜並木の紅葉



沼津河川国道事務所からの香貫山の紅・黄葉も美しい

り、知る人ぞ知る名所となっている。

これより少し伊豆の中に足を踏み入れれば、ポートから見る紅葉があでやかな世界を広げる伊東の「一碧湖周辺」や、2,000本ものモミジが群生し、ふところ深く心をいやしてくれる修善寺の「自然公園」や、どの橋からの眺望もお薦めの温泉場の中央を流れる「桂川」、さらに天城湯ヶ島にまで足を伸ばせば、「持越川」・「猫越川」・「本谷川」の溪流沿い、それに「滑沢溪谷」や、天城トンネルを越えた河津町の「七滝周辺」等々、見どころには事欠かない。

考えてみれば、川端康成の「伊豆の踊り子」の舞台は秋の天城路だったのだし、石川さゆりの唄う「天城越え」ではズバリ、

肩のむこうに あなたア・・・ 山が～燃える～
とまで言い切っている。



時あたかも、安倍総理大臣が「美しい国」を提唱するのを待っていたかのように、国土交通省では、行政・住民・利用者などが一体となって、地域の沿道景観や自然環境の保全・整備に取り組もうという「日本風景街道（シーニック・バイウェイ）」に取り組もうとしている。

「シーニック」は景色、「バイウェイ」はわき道、寄り道の意であり、まさに豊かな自然美を誇り、これをさらに充実して、滞在型・逗留型の伊豆を目指そうという我々には、絶好の機会が到来したといえる。

そこで、まずは、地元の我々で、伊豆を歩き回ろう、走り回ろう。

伊豆一円を動き回って、「暖国・伊豆の紅葉！」のように、隠された地域の宝を掘り出そう、触れ合おう。

その中で、

――まだまだ紅葉が足りないというのなら、京都の神社・仏閣を見習って、計画的・効果的に紅葉樹



11月中旬から12月下旬にかけてライトアップされる熱海梅園



湖面に映るシルエットに幻惑されそうな一碧湖



スケール大きな紅葉を知らせる修善寺の「もみじまつり」のパンフレット

を植栽しよう。

――伊豆にふさわしくない看板なら、撤去しよう。

――電線が邪魔なら、電線を地中化しよう。

――ライトアップが必要なら、ライトアップをしよう。

――絶好のビューポイント、フォトポイントだと思われる場所に、駐車スペースがないのなら、環境に配慮した駐車場を作ろう。

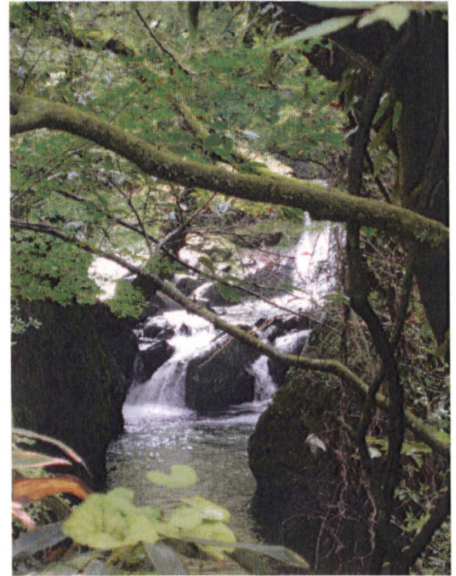
――伊豆にふさわしい土木構造物でないなら、思い切って造りかえよう。

――伊豆には豊富な農産物・海産物があるのだから、これとタイアップできていないのなら、できるような施設・施策を考えよう。



先ごろ、伊豆の一体的発展の象徴としての「伊豆ナンバー」も創設された。

これを期に、さらに一層伊豆の魅力を高めるためには、「日本風景街道（シーニック・バイウェイ）」の活用に努めるとともに、この秋には、まず「伊豆の紅葉」を、地元の我々が堪能することから始めようではないか。



深秋には紅・黄葉と溪流とのコントラストがきれいな持越川